

2022 年 11 月 15 日

「箱根駅伝の誕生と旧制小田原中学」

<講義概要>

大正 9 (1920) 年の第 1 回東京箱根間関東大学駅伝競走から 1 世紀を経て 2024 年には第 100 回大会を迎える「箱根駅伝」の歴史をたどる講座。箱根駅伝誕生の秘話や旧制小田原中学(現県立小田原高校)や地域がどのような役割を果たし、その当時のスポーツの歴史的・社会的背景など多彩な視点からの講義とパネルディスカッションを行う。

<講義内容>

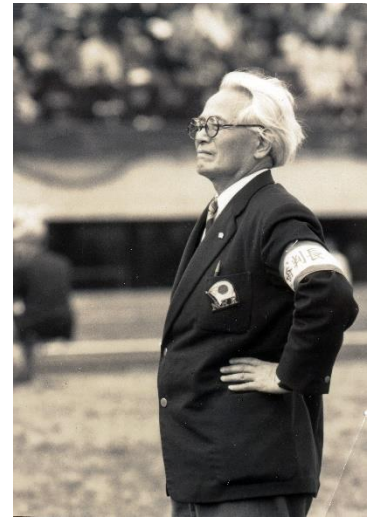
<p>第 1 回 箱根駅伝の誕生 講師：澁谷彰久 11 月 19 日 (土) 13 時～14 時</p> <p>駅伝創設時に関わった人々の群像を澁谷寿光を通して検証する。澁谷は箱根駅伝の審判長を戦後 30 年間務めたが、母校である小田原中学に教諭として赴任時に箱根駅伝ルートとコースの詳細な現地調査を行っていたことを明らかにする。</p>
<p>第 2 回 箱根駅伝の歴史 講師：有吉正博 11 月 19 日 (土) 14 時～15 時</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 箱根駅伝が「陸上競技の世界遺産」の大会として世界陸連により認定された意義、 2. 私自身の箱根駅伝(選手としての箱根駅伝)箱根合宿等、地域社会との関わり、 3. 東海大学初出場から初優勝まで指導者から見た箱根駅伝、 4. 箱根駅伝からオリンピック等、世界に羽ばたいたランナー達について
<p>第 3 回 箱根駅伝とオリンピック 講師：真田 久 11 月 19 日 (土) 15 時～16 時</p> <p>1920 年に開催されたアントワープ・オリンピックでのマラソンに出場した日本人 4 名のうち 3 名は、第 1 回箱根駅伝に関係した選手だった。世界大戦と感染症によるパンデミック直後に開催された大会で、日本選手は何を学んだのだろうか。</p>
<p>第 4 回 嘉納治五郎とオリンピック 講師：真田 久 11 月 26 日 (土) 13 時～14 時</p> <p>アントワープ 1920 大会の団長、嘉納治五郎は大会後、世界の変化を見て回った。帰国後彼は「精力善用・自他共栄」そして人種の偏見の撤廃を宣言する。さらに、スポーツによる大震災からの復興とオリンピックの東京招致へと向かった。</p>
<p>第 5 回 小田原中学の歴史と徒歩部 講師：仮野慎一 11 月 26 日 (土) 14 時～15 時</p> <p>神奈川県第二中学校の創立、吉田庫三初代校長の教育方針、明治時代の運動部、「二宮金次郎」になった遠距離通学生たち、閑院宮のご修学、校内マラソン大会、徒歩部を育てた澁谷寿光先生、「マラソンの河野兄弟」、徒歩部の活躍、小田原中学徒歩部と箱根駅伝について紹介する。</p>
<p>第 6 回 パネルディスカッション 11 月 26 日 (土) 15 時～16 時</p> <p>テーマ：「箱根駅伝創設の時代背景と小田原中学の役割について」</p> <p>登壇者：有吉正博・真田 久・仮野慎一 司会：澁谷彰久</p>

第1回 箱根駅伝の誕生

講師：澁谷彰久

澁谷壽光（昭和35年国立競技場）

（写真提供/澁谷彰久氏）



1 プロローグ

本講義は各専門家がオムニバス形式で講師を務めるが、箱根駅伝の創設と旧制小田原中学の当時の様子、その後の選手の活躍などを通して、箱根駅伝と地域のつながりや歴史的な意義についてを全体テーマとしたい。

現在も引き継がれている箱根駅伝のコース・中継地点が、どのように選定され、決定されたかは、未だ伝聞の域を出ず、その確かな経緯や当時のコース実測がどのように行われたかは定かではない。そこで澁谷壽光という人物に焦点をあて、当時のスポーツ史的な背景などから駅伝創設時の先達たちの姿を描き出すことを試みる。澁谷壽光（しぶやとしみつ、1894-1983、以下澁谷）は、神奈川県松田町の出身で、旧制県立第二中学（現県立小田原高校）、東京高等師範（現筑波大学）物理化学科卒業後、母校県立第二中学教諭等を務めた。その間、学生時代からの陸上競技選手歴を経て、大会運営、審判として箱根駅伝、日本陸上競技連盟の創設から、1964年オリンピック東京大会の陸上競技審判団長を務め、戦前、戦後の国内外の大会を通じて、生涯を陸上競技、マラソンに捧げた教育者、実践者であった。

澁谷は、I O Cが創設された年1894（明治27）年の3月26日に生まれ、松田小学校で学び、その後、神奈川県立第二中学（現小田原高校）へと進む。県立第二中学校（後に小田原中学校）は1901（明治34）年4月に開学した。校地は現在の東海道線小田原駅の地であったが、当時の東海道線は後述のように御殿場線を通り、小田原駅はまだ存在していなかった。澁谷の通学路は酒匂川沿いの堤防道であった。自宅である松田から学校までの距離は約13キロ。今でも歩けば大人でも片道2時間はかかる。明治期の中学に通う子弟は、その地域に限られていたわけでない。旧制小田原中学の当時の通学範囲は神奈川の西部全域を含んでいた。汽車通学もあったであろうが、澁谷もこの通学で足腰を鍛え、基礎体力を養うことができた。



嘉納治五郎

(写真提供/講道館)



金栗四三

(写真提供/玉名市)

2 嘉納治五郎・金栗四三（かなくり しろう）と東京高師徒歩部

澁谷は、1913（大正2）年4月 東京高等師範の数物化学専攻に入学する。当時校長の嘉納治五郎（以下嘉納）は1893年（明治26年）に東京高等師範学校校長に着任し、「精力善用・自他共栄」と平和主義を唱えた国際人であった。澁谷の陸上競技は、高師での競技選手としてスタートを切り、高師徒歩部での練習、大会参加、運営の経験を積む。在学中、澁谷は嘉納から直接、金栗四三（以下金栗）を手伝うよう命じられ、練習会の開催準備と運営について任された（大正5年千葉県北条（現在の館山）での練習会等）。澁谷にとって若い時期のこの経験は、大会運営など、その後の大きな仕事の基礎となった。高師卒業後も、嘉納や金栗を中心とした駅伝や陸上競技連盟創設などに参画し、その活動は、大会運営や競技審判の実施者の育成に傾注していくことになる。

金栗は澁谷の3年先輩で、その健脚を見込まれ徒歩部に入り、練習に明け暮れることになる。澁谷と同時期に高師徒歩部（可児徳部長）には、金栗（高師研究科・地理歴史）を筆頭に、先輩である野口源三郎（地理歴史）などが在籍していた。高師の卒業生たちは、各地の中学校へ教諭として奉職することになるが、当時のアスリートは文武両道の教育者たちがその先頭を走っていたことが窺われる。金栗と澁谷は、その後マラソンや駅伝を通じて生涯にわたり先輩後輩として親交していくことになる。



東京高師徒歩部（写真提供/澁谷彰久氏）

3 小田原中学へ赴任

澁谷は1918（大正7）年5月東京高等師範学校本科卒業し、教育科物理及び化学科教員免許取得後、同年5月26日、母校である旧制神奈川県立小田原中学校に物理化学の教諭として赴任した。校長は澁谷の第二中学時代の校長でもあった阿部宗孝であった。当時、小田原中学に閑院宮春仁王が在学されており、阿部校長は、「化学の免許状を持っていない者が殿下の化学を教えるわけにはいかない」と熊本県立中学済々黌（せいせいこう）（現熊本県立済々黌高等学校）に就職が決まっていたのを小田原中学に引っ張ってきたといわれる。澁谷が赴任すると徒歩部の顧問となり大勢の学生が指導を受け、部員数は60名を超えるに至った。澁谷は小田原の唐人町（今の小田原市浜町1・3丁目付近）に下宿していた。ちょうど東海道（国道1号線）の北側に面するあたりで、河野謙三（後の参議院議長）ら当時の部員たちは「よい先生が来られた」とばかりに、毎日授業後は仲間7、8人と共に下宿へ押しかけ、そこで着替えて、澁谷を先頭に国府津駅の方まで一回りして戻って来るのがいつものコースであった。後に河野は、箱根駅伝の走者となる。当時、徒歩部の部室などは学校にはなく、澁谷の下宿は、部員たちの格好の部室代わりとなり、澁谷の指導と毎日の練習の場となった。河野謙三は1918（大正7）年11月10日の第2回藤沢横浜間マラソン競走（距離5里（約19.64km）で2着（記録は1時間22分48秒）という成績を残していた。この時、すでに澁谷の指導の下で河野謙三は長距離走者としての頭角を現していた。横浜貿易新報のインタビューに、河野は「好成绩を得ることができたのは、みんな澁谷先生のおかげです。私たちはただその走法を実施したにすぎません」と答えた。澁谷は、小田原中学赴任後も東師の先輩である金栗や東師徒歩部の選手仲間を招聘し、指導を受けていた。金栗は何度か来校し、部員たちといっしょに走ったり、直接いろいろな指導を行い、1918（大正7）年10月には中学で講演会を行い、駆足についての経験談や、その方法・注意について詳しい話を直接生徒に聴かせていた。そのほかにも、当時、早稲田大学競走部でオリンピック選手であった三浦弥兵衛も時々コーチに来ていた。小田原中学の徒歩部は、澁谷の縁で当時の日本を代表するランナーに指導されていたことになる。



大正11年県下中等学校駅伝競走優勝記念

右端澁谷、左端守永校長（第3代）、中央優勝旗を持つ部員は酒井恒（後にカニ博士として昭和天皇のご相談相手となる甲殻類研究者の第1人者となる）

（写真提供/澁谷彰久氏）

4 箱根駅伝の誕生

1917年の東海道駅伝徒歩競走の成功を経験した金栗たちは、その後も全国を回り、選手強化や競技普及の啓蒙に東奔西走する。一方で、1918（大正8）年4月、関東学生陸上競技連盟が創設される。陸上競技では日本最古の連盟組織となる。また、日本陸上競技連盟も日本学生陸上競技連合もない時期に、学生主体の陸上競技組織が結成された意義は大きい。この創設時期と金栗たちが箱根駅伝を企画した時期が重なることになる。

この東海道駅伝徒歩競走に参加した、金栗以下の東京高師の関係者の間に、「学生だけの手になる、世の模範になる大レースをやろう」という声を持ちあがり、参加出来る大学、高専を探し求めた。この年の10月下旬ごろに、後に金栗の勤務先となる東京府女子師範（竹早町）に早稲田、明治、東京帝大、高師、日大、中大、立大、農大、日本歯科の9校が集まり、駅伝開催に向けての協議を行い各校からの賛同を得た。もちろん、翌年に開催が決まった第7回オリンピック・アントワープ大会への出場を夢見る学生選手たちの期待も後押ししたことであろう。

問題は資金集めであった。3年前に成功をおさめた「東海道駅伝徒歩競争」では読売新聞の全面的な協力を得ていたが、今回はその時のような大規模な競技会は想定できない。しかし、金栗たちはスポーツへの理解の高かった報知新聞へ協力を申し入れた。当時の在京新聞社の発行部数の上位は、報知を筆頭に東京日日、東京朝日、国民、時事の日刊紙があり、報知新聞の資金力は頼りになった。しかも報知新聞はこの時期に、富士登山競争、浅間登山競争、蔵王越え競走などを金栗たちが中心になって企画していた実績もあり、何か新しい企画を探していたことも幸いした。青年達の情熱と粘りは遂に周囲を動かし、報知の事業部長煙山二郎（NHK 創立者の1人）と企画部長寺田稔彦の支援を取り付け、大会開催の準備に乗り出す。報知新聞社の主催（現在は後援）で新たな駅伝は実施を決定した。この企画は、1919（大正8）年の暮れ12月に報知新聞社内でも計画され、翌年、1月22日に早稲田、慶應、明治、高師の4校の出場校が決まり、第1回大会を「日比谷一箱根間四大校駅伝」の名称で、2月14日（土曜）に往路、翌15日（日曜）に復路が行われることが決まった。

5 箱根駅伝のコース選定

大会を実施する上で、当初からコースをどこにするかは、複数の計画が提案された。

第1案 徳川御三家に因んで、水戸～東京間片道8区間。

第2案 日光中禅寺湖の湯元を発し宇都宮～東京に至る片道8区間。

第3案 東京の報知新聞社前（現在の有楽町駅前「現読売会館」）を発着点とし、東海道を箱根の関所跡で折返す往復10区間。

報知新聞社側と高師の関係者で色々に研究を進めた結果、第1案は片道コースであり運営上種々の難点がある。第2案は、陸羽街道、陸前浜街道（現在の国道4号線、6号線）は連絡、交通機関との関連が悪く、中継地の選定にも難があり、多勢の宿泊も容易でない。という訳で、結局第3案に決定したとされている。ここで、澁谷の名前が登場する。

澁谷と駅伝コースの調査については、多くの黒田論文(1)がその事実を指摘している。黒田氏は「コースの変遷と共に、中継所も何度かの変更を見たものの、宿場と云う点では全く変わっておらず、後年永い間(箱根駅伝の)審判長を勤めた故澁谷氏の研究が立派であった事の証明であろう」と述べている。また、「現在の東京一箱根間往復のコースと、中継地が採択された際には、当時小田原中学に奉職していた東京高師出身の長距離走者澁谷寿光氏が、自身で詳細に調べ上げた並々ならぬ力添えを忘れることは出来ない」とし、さらに、澁谷が調べ上げた成果(コース情報)を「一々東京に送って貴重な資料とされた」ことも指摘している。そして、黒田氏はコース選定の経緯につき、「関東の学生対抗形式による、大会の実施は決定したものの、新聞社と云うものは、実行するか否かを先に決めてから細目を討議して行く所だそうで、実際のコース、中継所(戦前は仲継所としていた)、宿泊、連絡の諸問題があり、中心になって実現に努力した、東京高等師範の人々の苦心は大変なものであったと聞いている。(中略)1917~20年当時(正しくは1919-24(筆者注))、小田原中学に勤務していた、高師出身の長距離走者澁谷寿光氏は、あらゆる角度から詳細な調査を続け、一々東京に知らせる地道な努力の末、遂に東京一箱根間往復のコースで実施と決定を見た」として、その当時の状況と澁谷の役割を記録に残している。

ここでの澁谷の役割はどのようなものであったろうか。黒田氏の証言によれば、箱根駅伝のコースの選定には、やはり澁谷を中心とした大会運営のための事前調査により、コース上の施設、車の運行、宿泊所、新聞社への通信手段の実現可能性が他のコース候補に比べ格段に優れていたことが決定的であったと述べている。金栗たちの駅伝競走の企画を箱根に導いたのは、澁谷の調査内容が極めて具体的で、大会実施に向けて何を準備し、人員や予算を計画する上での東京(報知新聞社)側の決断が短期間でスムーズに運んだことが大きい。

(1)黒田論文 以下の文献から参照した。

黒田圭助『箱根駅伝史抄』(桜門陸友会・1958)、黒田圭助「箱根駅伝抄本」序文 土岐善磨(桜門陸友会・1958)、
黒田圭助「箱根駅伝小史 第一編(駅伝誕生より文理大参加まで)」(1961年)、黒田圭助「東京箱根駅伝競走の50年」
新体育(新体育社・1968年01月) p144~148、黒田圭助「日本駅伝競走史: 1. 発祥-「東海道駅伝徒歩競走」」日本
体育学会大会号(36)、82頁、1985-08-20 社団法人日本体育学会、黒田圭助「日本駅伝競走史: 11 東京箱根 大学
駅伝の生誕」日本体育学会大会号(37A)、81頁、1986-10-01 社団法人日本体育学会

澁谷は後に、自分が一人で箱根駅伝のコースを測ったものだと家族に伝えていた。箱根の山道を夜遅くまで、松明の明かりをかざして、工事用の巻尺でコースを測ったとも言っている。そもそも、澁谷が実際にコースを測った時期はいつだったのだろうか。金栗や野口たちが、箱根駅伝の構想を具体化した時期は大正8年の10月頃とされている。11月には参加各校が箱根や小田原で合宿やコースの下見をし、その翌年の1月には報知新聞社で大会概要を参加校に示しているので、準備期間はわずか3か月程度しかなかったことになる。澁谷はこの時期、小田原中学の物理化学の教員として小田原の唐人町、今の国道1号線の北側に面するあたりに下宿していた。小田原中学の徒歩部の生徒たちを従えて、駅伝コースとなるあたりを毎日のように走っていたことは間違いない。また、本人は、理科の物理化学の専任教員として赴任しており、他の教員よりは時

間に余裕があったそうだ。高師の先輩である金栗や野口たちから、コース調査や設計の取りまとめを依頼されるには適任者であったことも想像に難くない。

箱根駅伝誕生前の4年間の関係当事者たちの足跡を以下の表にまとめた。

年号	大会・出来事	人物・動き
1917 (大正6)	4月27～29日 東海道駅伝徒歩競走 5月8日～12 第三回極東選手権競技大会	金栗四三（独協中学教員）東軍アンカー 野口源三郎（松本中学教員）10種競技で優勝
1918 (大正7)		澁谷寿光 5月小田原中学物理化学教諭として赴任 (10月 金栗が小田原中学で講演・指導) 野口源三郎 4月東京高師教員 7月大日本体育協会常務委員 12月文部省高等学校体操科教授要目調査委員
1919 (大正8)	3月17日極東選手権大会から 大日本体育協会が脱退 4月19日関東学生陸上競技連盟が創設	宮下静一郎（東大）、金栗四三・野口源三郎・東口真平（高師）らによる学生主体の組織活動。 10月 金栗・野口・沢田による協議 10月下旬 金栗が各校に出場要請 澁谷がコースを調査したと思われる時期 11月参加各校がコース下見と合宿を行う 12月 報知新聞社内で駅伝を計画・実施準備
1920 (大正9)	2月14・15日 日比谷一箱根間四大校駅伝	1月22日 早稲田、慶應、明治、高師の4校出場校と金栗、報知新聞社で協議、大会日決定。

6 澁谷の役割（まとめ）

- (1) 金栗四三や野口源三郎などの東京高等師範の長距離陸上界の創始者たちの中で選手として共に競い合い、よき指導者、教育者としての基礎を作ることができた。
- (2) 日本の陸上競技創設期の中で、競技会の技術的な面で国際陸上競技連盟規約やルールの研究やわが国への導入を野口源三郎らと共にやった。
- (3) 陸上競技選手であったと同時に、競技大会の開催のための運営面での経験を早い時期から、嘉納治五郎などから指示され、自ら総務などの仕事を行っていた。
- (4) 幼少期から育った小田原、箱根周辺の土地勘はかなりあった。小田原中学赴任したことで出身校・地元とのつながりが深く、特に小田原中学徒歩部員の協力が得られた。

(以上)

地域アカデミア開設記念 Web 講座

「箱根駅伝の誕生と旧制小田原中学」講義資料

第 2 回 箱根駅伝の歴史

有吉正博



World Athletics Heritage Award
「陸上競技の世界歴史遺産」認定

10 MAY 2019 PRESS RELEASE YOKOHAMA, JAPAN
PENN RELAYS AND HAKONE EKIDEN HEAD WORLD ATHLETICS HERITAGE PLAQUE ANNOUNCEMENTS AT IAAF WORLD RELAYS IN YOKOHAMA

I 箱根駅伝が陸上競技の世界遺産に認定 ○2019年5月

世界陸上競技連盟（WA）は大会部門のヘリテージプラークアワードとしてペンリレー（米国 1895 年）と箱根駅伝を認定した。

[Heritage Plaques honouring Japanese legends Nambu and Oda unveiled in Tokyo | World Athletics](#)

○2022年5月

ヘリテージプラーク（陸上世界遺産）の贈呈式

国立競技場（有観客）で開催された第 101 回関東インカレで、世界陸連横川浩理事（日本陸連名誉会長）

よりプラークが関東学生陸上競技連盟に贈呈された。

プラークは箱根駅伝往路フィニッシュ地点（復路スタート地点）脇にある箱根駅伝ミュージアム（箱根町）に常時展示されている。

箱根駅伝が認定された世界陸連ヘリテージプラーク（陸上世界遺産）贈呈式が執り行われました！



箱根駅伝ミュージアム（箱根町）

II 昭和期の箱根駅伝

○選手としての箱根駅伝

（43 回大会から 46 回大会）

43 回大会 9 区 9 位でタスキを 10 区油野先輩（3 年生）へ総合 9 位。シード権獲得。

44 回大会 5 区を走るために、箱根合宿等を重ねる。「元箱根のひらい商店」「箱根町のうちらはら」にお世話になる。家庭教師等。

45 回、46 回 2 区

○伴走者、自転車、監督車、運営管理車の歴史。



45 回大会 2 区

東京 1区 鶴見 2区 戸塚 3区 平塚 4区 小田原 5区 箱根
 10区 9区 8区 7区 6区

私の箱根駅伝（東京教育大学：現筑波大学）

43回大会（1967年）9区 戸塚～鶴見
 44回（1968年）5区 小田原～箱根
 45回（1969年）2区 鶴見～戸塚
 46回（1970年）2区 鶴見～戸塚

43回大会 9区 区間7位
 44回大会 5区 区間7位
 45回大会 2区 区間5位
 46回大会 2区 区間12位



45回大会駒沢大学をかわす。



箱根合宿（元箱根「ひら井」のおばちゃんたち



家庭教師をした中学1年生と再会

○43回大会駒沢大学初出場

○元箱根おみやげ「平井商店」に東京教育大学が代々お世話になる。5区、6区を走る選手たちの合宿所として「ひらいのおばちゃん」が献身的に支えていただいた。

○お世話になった「ひらいのおばちゃん」を10数年後OBたちでお招きし、感謝の会を持った。

○「ひらいのおばちゃん」のお孫さんが現在元箱根観光協会会長として、大会を支えていただき、お世話になっている。

○箱根町内原商店「箱根細工お土産屋」の娘さん、当時（44回1968年）中学3年生を住み込みの家庭教師しながら、トレーニング合宿させていただいた。

○毎年往路フィニッシュ地点で、応援していただいている。

こうした沿道（地域社会）の方々との密接な関わりは、各大学、各選手が長い歴史の中で育まれている。道路スポーツ駅伝ならではの特性と捉えることもできる。



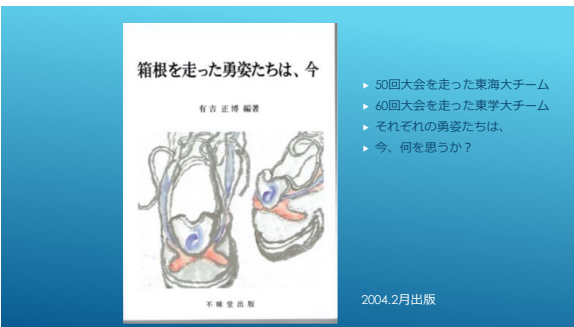
東海大学初出場（49回大会1973年）

東海大初出場（49回大会）監督車（自衛隊ジープ）



46年前、東海大初出場を成し遂げたおじさんたち

東海大初出場を成し遂げたおじさんたち



箱根を走った勇姿たちは、今

有吉正博 編著

- ▶ 50回大会を走った東海大チーム
- ▶ 60回大会を走った東学大チーム
- ▶ それぞれの勇姿たちは、
- ▶ 今、何を思うか？

不昧堂出版

2004.2月出版

「箱根を走った勇姿たちは、今」

Ⅲ 指導者としての箱根駅伝

○東海大学時代

箱根駅伝初出場から6位入賞まで

第49回大会（コーチ1年目）

初出場（予選会八王子）

監督車（自衛隊の協力で全チームジープ）

第50回往路6位復路11位総合9位

1区宮田将美区間賞

第51回往路12位復路10位総合10位

第52回往路15位復路13位総合13位

第53回往路5位復路6位総合6位

第54回往路12位復路9位総合10位

○東京学芸大学時代

予選会から60回記念大会23年振りの出場

往路19位復路19位総合19位

50回記念大会を走った東海大チーム

30年後の勇姿たち

60回記念大会を走った学芸大チーム

20年後の勇姿たち

「箱根を走った勇姿たちは、今」

有吉正博編著 不昧堂出版（2004年）



（山下副学長と両角監督）

第95回箱根駅伝東海大学初優勝

初出場から46年

第95回東海大学初優勝

往路2位復路2位総合1位

初出場から46年

○山下泰裕東海大副学長（JOC会長）は東

海大初出場当時、体育学部学生

表. 箱根駅伝からオリンピック出場者一覧

オリンピック大会	年号	人数	オリンピック大会	年号	人数
アントワープ	1920年	4	モントリオール	1976年	2
パリ	1924年	3	モスクワ	1980年	3
アムステルダム	1928年	2	ロサンゼルス	1984年	3
ロサンゼルス	1932年	6	ソウル	1988年	4
ベルリン	1936年	9	バルセロナ	1992年	4
ヘルシンキ	1952年	5	アトランタ	1996年	4
メルボルン	1956年	3	シドニー	2000年	3
ローマ	1960年	1	アテネ	2004年	2
東京	1964年	7	北京	2008年	5
メキシコ	1968年	6	ロンドン	2012年	4
ミュンヘン	1972年	4	リオデジャネイロ	2016年	7
			東京	2021年	10
					計 101

箱根から世界へ

VI 箱根駅伝から世界へ

第1回(1920年)を走った大浦留市(高師)、茂木善作(高師)、三浦弥平(早大)は同年第7回アントワープ五輪に出場。

第32回2020東京五輪には、箱根駅伝を走った選手が過去最多10名出場し、大迫傑選手(早大OB)がマラソン6位入賞、三浦隆司選手(順大)が3000sc7位入賞するなど活躍した。

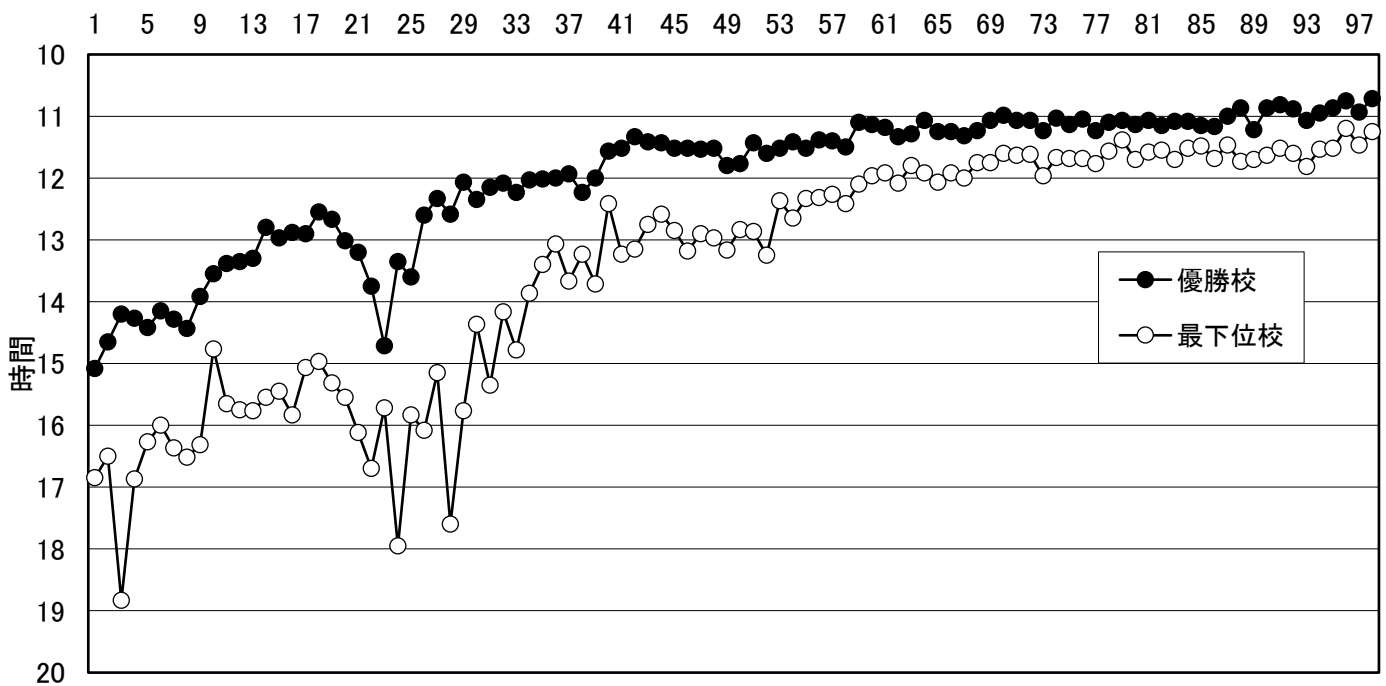
アントワープ大会から東京五輪まで延べ101人の箱根駅伝経験者がオリンピックに出場した。



坂東 悠汰	富士通	(法大)	5000
松枝 博輝	富士通	(順天堂大)	5000
相澤 晃太	旭化成	(東洋大)	10000
伊藤 達彦	ホンダ	(東京国際大)	10000
三浦 龍司	順天堂大学		3000SC
山口 浩勢	愛三工業	(城西大)	3000SC
青木 涼真	ホンダ	(法大)	3000SC
大迫 傑	Nike ORPJT	(早大)	マラソン
服部 勇馬	トヨタ自動車	(東洋大)	マラソン
中村 匠吾	富士通	(駒澤大)	マラソン

箱根駅伝から、東京五輪へ

図1. 箱根駅伝総合優勝記録、および最下位の記録の推移



第3回 箱根駅伝とオリンピック

-アントワープ1920大会-

真田 久



第1回箱根駅伝優勝の東京高師（筑波大学所蔵）

1 アントワープ1920大会出場選手

○1920年2月14,15日

「日比谷-箱根間四大校駅伝」

（第1回箱根駅伝）

早稲田、慶應、明治、東京高師



アントワープ1920 日本選手団 入場行進（Olympiska Spelen Antwerpen1920より）

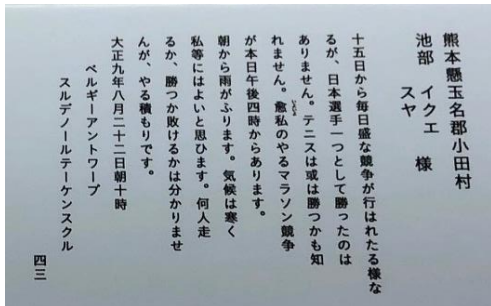
第7回アントワープ1920大会

日本選手団15名中12名が陸上競技

6名が長距離のうち4名がマラソン

- ・金栗四三（大日本体育協会）
- ・茂木善作（東京高等師範学校）
- ・三浦弥平（早稲田大学）
- ・八島健三（小樽中学校）

大浦留市、佐野幸之助：10000mと5000m、茂木：10000m 出場



マラソンレース当日の書簡 8月22日（書簡は玉名市所蔵）

金栗四三

1891.8 熊本県玉名郡、農家・醸造家に生誕

1910 東京高師に入学

1912 スtockホルム大会出場

1914 世界新記録

1916 ベルリン1916大会中止

1920 箱根駅伝創設し審判委員



すといんせ發出に將一ナランソラマの九十四

マラソンスタート

(野口源三郎:第7回オリンピック陸上競技の印象.1921より)

茂木善作

1893.12.10 農家の3男として生誕

1913 山形師範卒業し尋常高等小教師

1918 東京高師入学、金栗に出会う

箱根駅伝では東京高師を優勝に導く

三浦弥平

1891.4 福島県伊達郡に生誕

1915.早大入学(24),競走部入部

1919.第1回関東学生,第7回日本選手権 25
マイル走で優勝

1920.2 第1回箱根駅伝5区を走る



アントワープ1920大会のポスター

八島健三

1902.4.6 北海道小樽に生誕

北海道小樽中学校卒

北海道初のオリンピック選手

大浦留市

1896.3 香川県飯野村の農家に生誕(3男)

1917 香川県師範を経て東京高師入学

1920 箱根駅伝5区1位

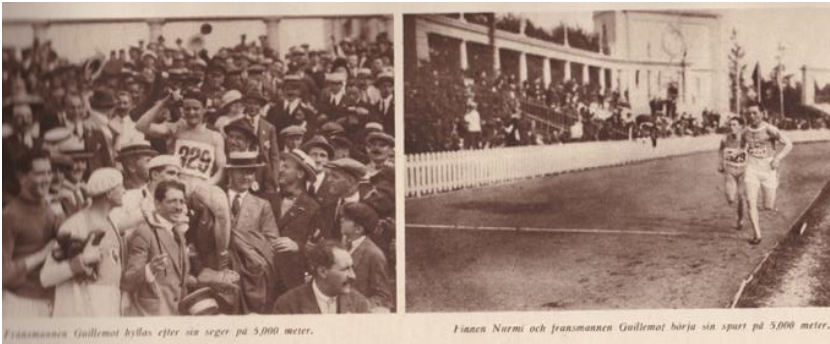


初のオリンピックシンボル掲揚と日の丸(IOC所蔵)

2. アントワープ1920で学んだもの

2-1. オリンピックシンボル掲揚(連帯)

「第7回大会がもたらしたものの、それはオリンピックが人類を団結させる祭典であるという共通認識を持てたことである」(クーベルタン, 1920)



ギルモ（仏）とヌルミ（フィンランド）のデッドヒート
（OlympiskaSpelen Antwerpen1920 より）

5000m と 10000m では、フィンランドのヌルミとフランスのギルモが優勝争いをした。5000m ではギルモ、10000m ではヌルミが勝つが、デッドヒートにそれぞれの応援団は相手の選手を応援した。 (チアースを3回言う)

「かかる気高い精神の流れは、万場の観衆を同化しないではいなかった。」

（野口：第7回オリンピック陸上競技の印象）

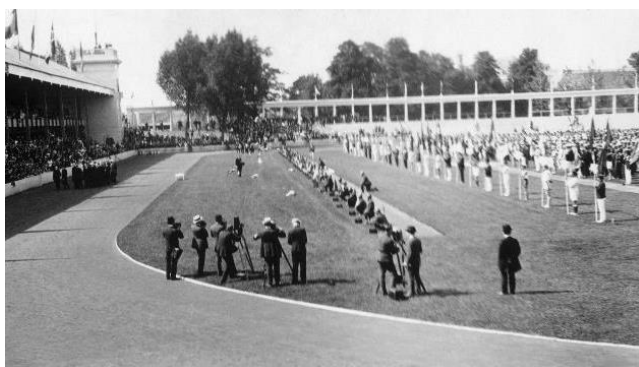


初の選手宣誓：フェンシングベルギー代表ヴィクトル・ボワン
（IOC 所蔵）

2-2. 選手宣誓：フェアプレー

800m 走の記録保持者、米国メレデッスが400m に出場し準決勝で敗退した際、その組で優勝したシェアー選手に握手して祝福した。

「体力と技術においては優勝できなかったが、スピリッツにおいては、依然世界の大選手であることを示した」（野口，1921より）



初の放鳩（IOC 所蔵）

2-3. 放鳩：平和

陸上 1500m の銀メダリスト、英国のフィリップ・ノエルベーカーは、兵士からアスリート、そして政治家になりノーベル平和賞受賞



女生徒と登山する金栗（玉名市所蔵）

2-4. アントワープ 1920 後の選手たち

金栗四三（1891.8-1983.11）

- ・ドイツで女性のスポーツの振興が必要と確信
- ・長距離走の普及とともに東京女子師範の教員として女性のスポーツを推進

茂木善作（1893.12-1974.12）

- ・満州体育協会役員、吉林師道大教授、承德師道学校長を経て帰国、日体協役員と共に山形県のスポーツ振興に寄与

三浦弥平（1891.4-1971.4）

- ・ベルリン大、ドイツ体育大に留学、スポーツクラブも経験、パリ大会出場
- ・1928 帰国し 1932 に「オリンピック村」を設立

- ・1948 自宅を「白根体育公民館」に開放
多くのマラソン大会を実施

八島健三（1902.4-1979.10）

- ・1921 第5回極東選手権に出場
- ・明治大学で箱根を6回走り、後進の育成

大浦留市（1896.3-1989.8）

- 満州で中学校、高等女学校等の校長
帰国後もマラソン等スポーツの普及に貢献



米国経由でアントワープに向かう日本選手団（野口, 1921 より）



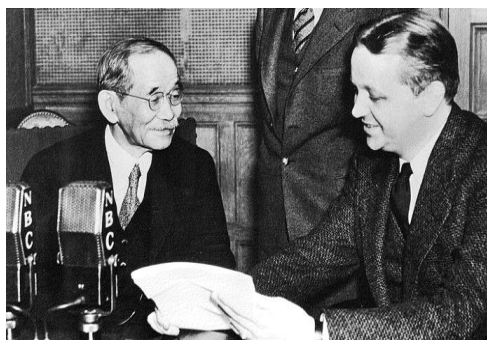
玉名市いちごマラソン（2019）

まとめ：箱根駅伝は第1回から競技力向上とスポーツの普及に貢献する人材を育成

- ・アントワープ 1920 マラソン 4 人は全員完走
- ・大会で連帯やフェアプレー、平和を学ぶ
- ・大会後も駅伝やスポーツの普及に貢献
- ・オリンピック精神の日本への普及、女性スポーツの発展にも貢献

第4回 嘉納治五郎とオリンピック

真田 久



海外メディアの取材を受ける嘉納（講道館所蔵）

1 アントワープ1920後の嘉納

大戦後の国際情勢などの意見交換
欧州では経済苦と混乱、ドイツへの警戒、国際連盟への期待、男女同権・女子教育の進展
米国では、日本理解の低さ、女子教育、移民教育のほか、黒人差別問題を直視
「黒人と白人とは到底融和することが出来ぬと思って居る者が多い」（嘉納）
精力善用・自他共栄の紹介も行う

講道館文化会設立（1922.1）

【宣言】

- 一、個人：身体を強健にし智徳を錬磨せよ
- 二、国家：常に必要なる改善を怠らざらむ
- 三、社会：個人団体各互に相助け相譲り徹底せる融和を実現せよ
- 四、世界：人種的偏見を去り文化の向上均霑に努め人類の共栄を図らん

《綱領》

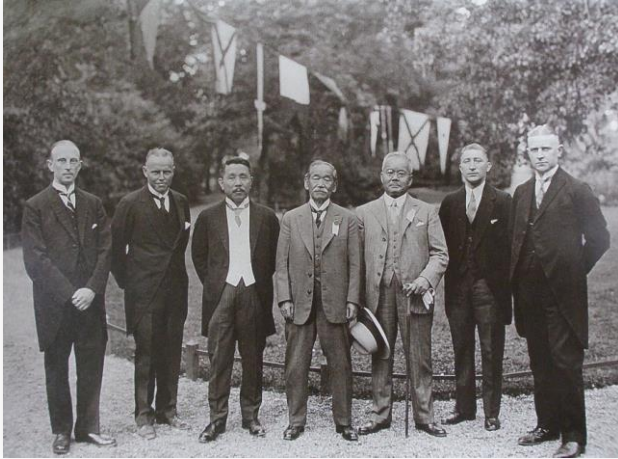
- 一、精力の最善活用は自己完成の要訣なり
 - 二、自己完成は他の完成を助くることに依って成就す
 - 三、自他完成は人類共栄の基なり
- ↓↓
- 精力善用・自他共栄



震災直後の銀座

2. 関東大震災の復興と東京1940

1. 全日本選手権競技会の開催
復興に尽くすべく、国民の士気を鼓舞するため、11月に開催
2. オリンピックへの代表派遣
翌年のパリ大会に万難を排して優秀な代表選手と指導者を派遣
3. 新東京に計画中の公園内に競技施設を建議
箱根駅伝では東京高師を優勝に導く

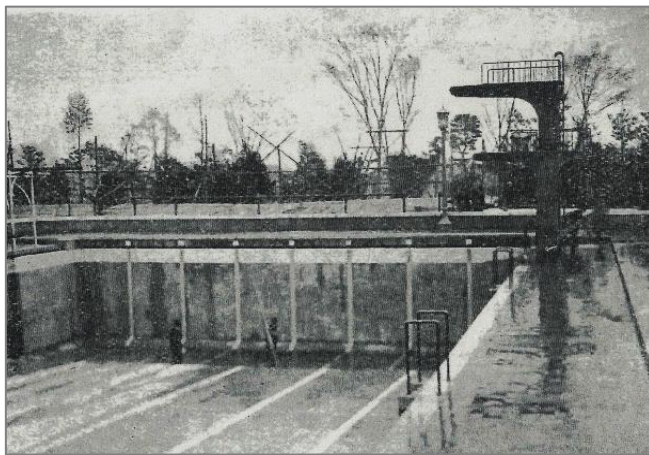


アムステルダムにて（講道館所蔵）

アムステルダム 1928: 三段跳（織田）金、
200m 平（鶴田）金、陸上 800m 女子（人見）銀

ロサンゼルス 1932: 水泳 5 種目で金、三段跳（南部）金、100m（吉岡）6 位、馬術（西）金

ベルリン 1936: 水泳 4 種目金、三段跳（田島）金
（原田）銀、棒高跳び（西田）銀（大江）銅、
マラソン 金（孫）銅（南）



浜町公園水泳場（水谷俊一、浜町公園写真 1931 より）

錦糸公園 1928 開園

競技場と庭球場

浜町公園 1929 開園

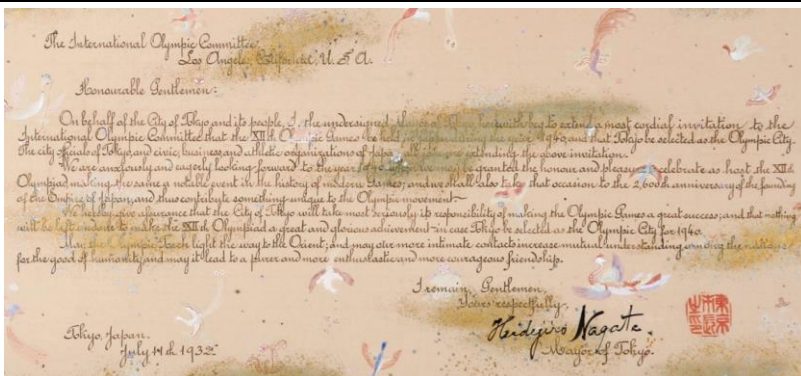
プール：火木土日 14:30-15:30 婦人専用
児童公園も充実

隅田公園 1931 開園

競漕；関東選手権、全日本選手権

野球：芝居団野球、区役所対抗軟式野球大会

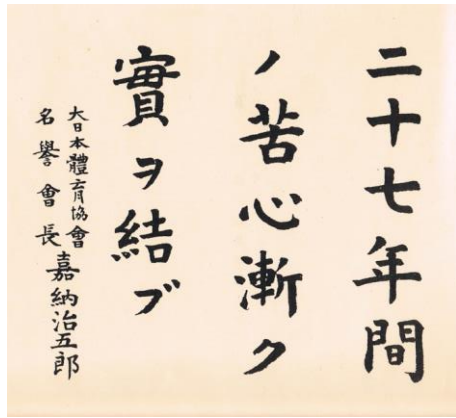
生涯スポーツの拠点に



嘉納から IOC に提出された東京市長（永田秀次郎）の招請状
（IOC 所蔵）

1940 大会の東京招致

1. オリンピック・ムーブメントへの貢献
2. 近代システムと伝統の調和
3. より美しく堅固になった東京での開催
4. スポーツ好き、ホスピタリティ



稲葉言治, 運動競技資料とオリンピック事情, 1936 より

1936. 7 IOC 総会 (ベルリン)

東京 36 票

ヘルシンキ 27 票

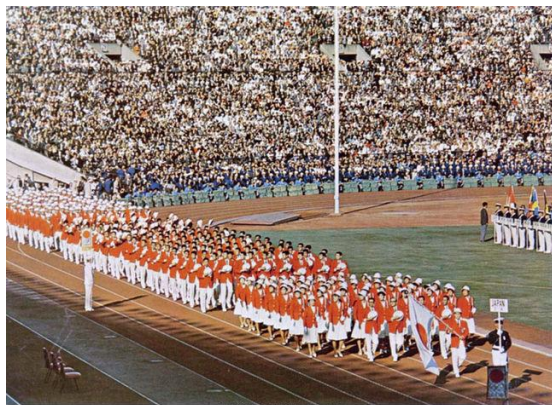
「IOC 委員に就任して 27 年間のオリンピック・ムーブメントが実を結んだ。今後は東京大会を世界の模範とするべく、またこれを機にオリンピックを世界の文化にせねばならない」(嘉納)



嘉納治五郎の葬儀 (講道館所蔵)

1938. 5 嘉納、氷川丸での帰途、船上で逝去
IOC 委員は弔意を示すメッセージ

1938. 7 日中戦争拡大による東京大会の返上



東京 1964 開会式

1959 ミュンヘン IOC 総会

平沢和重「日本では学校の授業で生徒が皆、オリンピックを学んでいる、開催の準備ができて
いる」

東京 1964 大会決定

柔道、オリンピック種目に

ブランデー会長開会式「オリンピックムーブメントは全ての大陸に及んで世界の文化になった。」



東京 2020 大会開会式

東京オリンピックと復興

1940: 関東大震災からの復興
スポーツ公園（市民スポーツ）

1964: 第二次大戦からの復興
平和の尊さ

2020: 東日本大震災、
感染症からの復興

オリンピック・モットー:

Faster, Higher, Stronger + Together



国立競技場前の嘉納像

まとめ

- ・アントワープ 1920 で「連帯」が尊ばれたが国際社会では人種差別など分断も進んでいた
- ・嘉納は人種的偏見の撤廃を宣言し、「精力善用・自他共栄」を掲げた
- ・大震災後にスポーツによる復興に取り組み東京招致につながるが、戦争と嘉納の逝去により 1940 年大会は返上
- ・世界の文化にすべく東京開催を、という考えは東京 1964 に結実、東京 2020 では「共に」（自他共栄）がオリンピック・モットーに

第5回 小田原中学の歴史と徒歩部

講師：仮野 慎一（かの しんいち）

1 神奈川県第二中学校の創立

文政 5 年 小田原藩が藩校「集成館」創設

明治 5 年 足柄県が変則中学「共同学校」開校

明治 7 年 足柄県が「小田原講習所」予科英学併設

明治 9 年 足柄県が「学制」に基づき予科英学を中学科に改める、神奈川県が「小田原講習所」中学科設置

明治 12 年 相模六郡が「六郡共立小田原中学校」開校

明治 14 年 「五郡共立小田原中学校」となる

明治 19 年 足柄下郡が「足柄下郡立小田原英学校」開校

明治 21 年 小田原町会議員らが「私立足柄英和学校」開設

明治 25 年 神奈川県当局が中学校小田原設置案を県会に提案

明治 28 年 小田原町会が中学校の小田原町設置を県に出願

明治 32 年 足柄下郡会議員らが中学校の小田原町設置を県に出願

明治 33 年 文部大臣が「神奈川県第二中学校」を小田原町に設置開校することを認可

3 明治時代の運動部

明治時代、放課後に生徒が自由に行った課外活動は剣道、庭球、野球の三つだけだった。それでも、生徒たちは元気溍刺とし、本当にめざましい活動ぶりであった。

剣道部

開校した明治34年（1901）9月、撃剣（げっけん）の課外授業を開始。これが剣道部の始まりである。指導者は体操の佐々木猪右衛門（いえもん）先生。いったん志望を申し出た以上は、正当な理由なしに欠席することは許されなかった。明治36年に雨天体操場が落成してから、さらに盛んになった。

野球部

明治34年に入学した生徒に大変上手な者がいて、翌明治35年に創部。他校との試合は一切厳禁だったが、時々、寄宿舍対本校の野球の試合が行われ、手に汗を握り、しのぎを削る猛烈な試合が行われた。体操の添田豊太郎先生が、寄宿舍の宿直になる時は、寄宿舍生が野球の練習に夢中になり、朝と夕方の自習が遅れがちとなり、学業成績が振るわなくなるということもあった。

庭球部（現ソフトテニス部）

明治35年に入学したある生徒が非常に熱心だったので、翌明治36年、教頭の仙波忠雄先生が吉田庫三校長に働きかけて庭球部とした。運動場に8面ほどのテニスコートが作られたが、地面はでこぼこ、丸太棒をコートの両側に立て、ネットが弓なりに張ってある具合だった。それでも、生徒たちは昼休みにわれ先にとラケットを取り合い、テニスを楽しんだ。放課後も遅くまで練習する生徒が多かった。ついに放課後1時間に制限したが、生徒は帰宅途中の最寄りの小学校へ立ち寄り、日没まで練習するので、各小学校の校長から苦情が絶えなかった。

※ 器械体操

明治37年頃、生徒たちが強い興味を持ち、放課後、練習を行うようになった。生徒が器械体操部を設けてほしいと再三申し出たので、添田豊太郎先生が職員会議に提案したが、器械体操は授業に属しているとのことで、ついに許可されなかった。

4 「二宮金次郎」になった遠距離通学生たち

当時の公共交通機関

東海道線は、国府津から山北・御殿場を経て沼津へ通じ、小田原駅はまだなかった。

小田急線も箱根登山鉄道も大雄山線もなく、路線バスもなかった。

明治33年に国府津・小田原・湯本間に開通した路面電車と、明治39年に小田原・熱海間に開通した軽便鉄道だけであった。

小田原中学の方針

通学距離が7～8キロまでは全員徒歩通学とし、自転車はぜいたく品として、自転車通学を禁止していた。

遠距離通学の様子

現在の小田原市曾我谷津から通学した小説家の尾崎一雄（明治45年～大正6年在学）は、次のように記している。

小学校までは片道2キロだったが、毎日片道8キロ、往復16キロを歩き出したので、かなりこたえた。薪（たきぎ）を背負いながら本を読む金次郎像を真似たわけではなく、実際上の必要から、私共は歩きながら勉強をした。片道1時間半～2時間という時間は貴重である。学校では運動で駆け廻り、疲れて家へ帰れば、やらねばならぬ復習予習も十分には出来ない。数学は無理だが、暗記ものは歩きながらも平気なので、大抵の子供が、昨夜の勉強の不備を登校の途次おぎなう。英単語を覚えるのは、歩きながらが最適だ。たまに馬力か荷車が通るだけの田舎道なので、目をつぶって歩いても交通事故は起らない。冬の朝6時半はまだ薄暗い。帰宅時間はもっと暗くなっている。

5 閑院宮のご修学

閑院宮とは

閑院宮は伏見宮、桂宮、有栖川宮と並ぶ江戸時代の四世襲親王家の一つで、新井白石の進言により創立。安永8年（1780）、後桃園天皇に皇子がないため、閑院宮から光格天皇が皇位を継承し、以来、皇統が現在の天皇まで続いている。

小田原中学でご修学

大正3年（1914）、阿部校長は閑院宮第6代載仁（ことひと）親王殿下より、第7代春仁（はるひと）王殿下のご教育を託された。殿下は健康上の理由から学習院初等科5学年を長期休学し、小田原御別邸に移られていた。殿下は地理歴史教室をご教室として、毎日1時間ずつ小学校5・6年課程の国語漢文と算術を学習された。春仁王殿下は大正5年（1916）、阿部校長は載仁親王殿下より「一切他の生徒と同様に」との説明を受け、本校第1学年に入学された。生徒たちは「殿下」と呼びし、「一日も早く親しくお話したい」と思った。殿下は宮様ぶらない、おとなしい温厚な方で、「皆と早く馴れて同級生として親しみたい」と思われた。翌大正6年（1917）から載仁親王殿下の希望により、お付き添いを廃したので、殿下は昼休みに生徒たちとサツ

カーをして遊び、剣道部、蕨折、全校マラソン競走、発火演習、修学旅行などに参加された。生徒たちも殿下を敬いながらも、親しくなっていた。

ご卒業

殿下は5年間、率先して校規を守り、生徒たちの模範となられた。天候にかかわらず、毎日天神山の御別邸から歩いて通学し、毎年剣道寒稽古は皆勤だった。5年生の新学期に学習院から籍を本校に移し、名実ともに本校の生徒となられた。大正10年（1921）3月、第16回卒業式が挙行された。当時、皇族が学習院ではなく、地方の中学校に入学し、5年間在学し、しかも生徒として卒業されることは異例であり、小田原中学にとって無上の光栄だった。

6 校内マラソン大会

全校マラソンの開始

大正5年（1916）10月、運動会の代わりに、全校生徒によるマラソン競走が開催された。阿部宗孝第二代校長はスポーツにたいへん熱心で、年一回、全校マラソンを盛大に行うことにした。全国的に見ても全校マラソンを行っていたのは、本校と愛知県立第一中学校（現愛知県立旭丘高校）ぐらいだった。大正12年の関東大震災以降、中断したが、昭和13年（1938）から昭和18年まで小田原・湯本間全校マラソン競走が開催され、戦後も引き続き行われた。

第1回校内マラソン大会の様子

スタートとゴール 小田原御用邸側のお堀の一部を埋立てた広場

8時スタート 1年生130名 酒匂川→鴨宮→飯泉 9.8キロ（2里半）のコース

8時10分スタート 2・3年生250名 国道1号線を一直線に国府津→親木橋→鴨宮 13.7キロ（3里半）のコース

8時20分スタート 4・5年生250名 国道1号線を一直線に国府津→曾我街道→成田 17.6キロ（4里半）のコース

「白い人影が見えた」と伝令がやって来た。「誰だ！ 関野だ！」1年甲組の関野豪三が元気にゴールに入った。拍手が起こる。タイムは45分20秒。続いて10秒遅れで、1年乙組の竹林秀雄がゴールする。3着は1年甲組の中沢俊雄であった。

やがて再び喝采の声に迎えられて姿を現したのは、2・3年生の優勝者、2年乙組の長田勝好である。タイムは54分30秒。1分後に3年乙組の西山盛之助がゴールし、3着に3年甲組の神保孝蔵、4着に2年甲組の河野謙三がゴールした。

4・5年生のトップランナーは誰であろうか。ある生徒は「山内」と予想し、またある生徒は「河野」と言う。突然姿を現したランナーは、小柄で見事な走りである。それは5年乙組の小野間芳信であった。タイムは1時間11分17秒。2着に4年乙組の古屋卯之助、3着に5年甲組の河野一郎が相次いでゴールした。

11時30分に全校生徒は整列。優勝者がメダルを手を持って微笑むと、全校生徒の拍手が湧き起こった。阿部校長の発声で万歳を三唱し、12時に解散。この日、閑院宮春仁王殿下が終始熱心に疾走をご覧になって、生徒と歓喜をともにされた。

7 徒歩部を育てた澁谷寿光先生

澁谷先生の赴任

大正6年（1917）4月、校友会（現生徒会）に徒歩部（現陸上競技部）が新設。種目はマ

ラソンである。翌大正7年5月、小田原中学出身の澁谷寿光先生が、東京高等師範学校（現筑波大学）を卒業し、物理化学の先生として赴任した。これは阿部校長が「化学の免許状を持っていない者が殿下の化学を教えるわけにはいかない」と、熊本県立中学済々黌（せいせいこう）（現熊本県立済々黌高校）に就職が決まっていたのを引っ張ったのである。

徒歩部の指導

先生はまだ若く、独身で、小田原の唐人町（とうじんちょう）（現小田原市浜町）に下宿していた。河野謙三たちは「よい先生が来られた」と、毎日授業が終わると走りたい仲間7～8人を誘い合わせ、下宿に押しかける。そこで着替え、先生を先頭に国道1号線を国府津まで一回りしてくるのである（往復約20キロ）。学校には部室などなく、澁谷先生とその下宿が徒歩部の出発点だった。部員たちは速く走るための方法を、手とり足と教えてもらった。

また、澁谷先生は、マラソンの金栗四三（かなくりしろう）と、東京高等師範学校時代に徒歩部の選手仲間だった。金栗四三は何度か小田原中学に来て、部員たちといっしょに走って指導を行い、大正7年10月には、全校生徒に講演会を行って、マラソンの経験談や方法・注意について詳しく話してくれた。そのほかに、早稲田大学競走部でオリンピック選手、マラソンの三浦弥兵衛選手も時々コーチに来てくれた。

大正7年11月、横浜貿易新報社主催の県下中等学校マラソン競走で、出場選手40名中、河野謙三の2位をはじめ徒歩部全員が20位以内を占めた。インタビューに河野謙三は「好成績を得ることができたのは、みんな澁谷先生のおかげです。私たちはただその走法を実施したにすぎません」と答えた。

9 徒歩部の活躍

大正5年10月 阿部宗孝第二代校長が校内マラソン大会を始める

大正5年11月 横浜貿易新報社（現神奈川新聞社）主催・第2回県下中等学校マラソン大会（藤沢—横浜）で河野一郎が12位

大正6年4月 校友会（現生徒会）に徒歩部（現陸上競技部）新設

大正6年11月 横浜貿易新報社（現神奈川新聞社）主催・第3回県下中等学校マラソン大会（藤沢—横浜）で長田勝好が3位、河野謙三が13位

大正7年5月 澁谷寿光先生が小田原中学校に赴任

大正7年11月 横浜貿易新報社（現神奈川新聞社）主催・第4回県下中等学校マラソン大会（藤沢—横浜）で河野謙三が2位

大正8年秋 報知新聞社主催・全国マラソン県予選で添田正寅が1位

大正10年11月 横浜貿易新報社（現神奈川新聞社）主催・第6回県下中等学校マラソン大会（藤沢—横浜）で穂坂正夫が2位

大正11年1月 横浜貿易新報社（現神奈川新聞社）主催・第1回県下中等学校駅伝競走（小田原—横浜5区間）で優勝

大正12年8月 第3回富士登山競走（横断9里）で小島光太郎が3位

大正13年4月 報知新聞社主催・全国中等学校駅伝（日比谷公園—横浜公園往復6区間）で13秒差で2位

大正13年3月 澁谷寿光先生が東京府立第六中学校（現都立新宿高校）へ離任

大正13年11月 横浜貿易新報社（現神奈川新聞社）主催・第2回県下中等学校駅伝競走（小田原－横浜5区間）で2位

大正15年7月 県下中等学校陸上競技選手権大会で、100メートルに藤井四郎、走高跳到水口勝利が、それぞれ県新記録で優勝

→ 阿部宗孝校長が全校マラソンを始め、澁谷寿光先生が徒歩部を指導したことにより、多くの長距離選手が育った。

10 小田原中学徒歩部と箱根駅伝

箱根駅伝第1回大会に協力した徒歩部

大正9年（1920）の第1回大会は、スタートが午後1時だったため、5区の山登りは夜になった。当時の箱根山は夜に人が通るところではなく、山犬が出ると言われていた。松明を焚くのが一番安全でよいただろうというので、澁谷寿光先生は部員たちに松明を作らせ、箱根山に配置した。ところが最終の慶応大学が上って来るのが遅く、松明が燃え尽きてしまって困った。また、箱根山は人通りが全くなく、その上ひどく石ころがゴロゴロしていたので、宮ノ下から芦ノ湯まで部員たちを選手に伴走させた。

箱根駅伝でも活躍した「マラソンの河野兄弟」

兄の一郎は早稲田大学競走部のオリンピック選手・三浦弥兵衛に勧誘され、競走部に入った。弟の謙三も小田原中学でコーチを受けた三浦から「卒業したら早稲田の競走部に来いよ」とスカウトされ、競走部に入った。兄弟で3年間、箱根駅伝を走った。

一郎は第1回～第4回大会を走り、第3回大会では7区で1位・区間賞。謙三は第2回～第4回大会を走り、第2回大会では1区で1位・区間賞、第3回大会では8区で1位・区間賞。

第3回大会において、7区1位・区間賞の兄一郎が襷を弟謙三に渡し、謙三が8区1位・区間賞となり、早稲田大学が初の総合優勝。早稲田大学は第3、4回大会を連覇（総合優勝）した。

資料編

○1917（大正6）年4月27～29日「東海道駅伝徒歩競走」出場者記録

区 間（距 離）	東 軍	西 軍
第1区 草津(25km)	飯塚 博(22 一高)	多久儀四郎(26 一中教員)
第2区 水口(23km)	河野 利雄(21 一高)	阪野 英一(18 一中5年)
第3区 北土山(12.5km)	竹内広三郎(26 高師)	六鹿 梅禮(19 一中5年)
第4区 亀山(24km)	生田喜代次(21 早大)	山田 鑑(18 一中3年)
第5区 四日市(24km)	田中 省吾(22 高師)	小出鏡之助(16 一中3年)
第6区 長島(17.5km)	田中 芳男(22 高師)	祖父江 弘(16 一中3年)
第7区 名古屋(26km)	中司 正嘉(22 東洋協会)	野崎 光三(19 一中卒業)
第8区 知立(25km)	山岸 徳平(24 高師)	加藤 勇(16 一中4年)
第9区 藤川(22km)	福島 熊男(21 一高)	森田 勝之助(16 一中3年)
第10区 豊橋(23.5km)	赤塚 勝次(24 高師)	横地 信之(16 一中2年)
第11区 新居(22.5km)	松浦 松男(24 高師)	水谷 繁(15 一中2年)
第12区 見附(24km)	志崎九五郎(22 高師)	江口 育良(16 一中2年)
第13区 掛川(17km)	吉積 泰(24 一高)	賀古御蓋(18 一中5年)
第14区 藤枝(28km)	秋葉 祐之(22 高師)	寺島 欽次郎(44 一中教諭)
第15区 静岡(19.5km)	加藤 武男(19 一高)	近藤勝次郎(28 一中関係者)
第16区 興津(17.5km)	広野 友七(23 高師)	松井 直吉(17 一中3年)
第17区 吉原(24km)	佐藤 卯吉(23 高師)	梅原 半二(15 一中3年)
第18区 三島(25km)	菅原道太郎(20 一高)	水野 銈昇(17 一中3年)
第19区 箱根(19km)	有原 末吉(27 高師)	青山 義親(17 一中3年)
第20区 国府津(20km)	佐々木 等(26 高師)	松田 盛一(19 一中2年)
第21区 藤沢(28km)	小野田 忠(23 高師)	池山 靖(15 一中2年)
第22区 川崎(33km)	井手 伊吉(27 銀行員)	小堀 四郎(16 一中3年)
第23区 上野(26km)	金粟 四三(27 高師卒)	日比野 寛(52 貴族院議員)

○第1回箱根駅伝（日比谷一箱根間四大校駅伝）2月14・15日の記録

		区間順位・走者・区間記録									
大 学	往 路	1区		2区		3区		4区		5区	
	復 路	6区		7区		8区		9区		10区	
高 師	往 路	1	山下馬之介 1時間25分 00秒	2	松元兼道 1時間18分 00秒	3	金持嘉一 1時間31分 30秒	3	大浦留市 1時間26分 05秒	1	森亨 1時間57分 28秒
	復 路	3	黒河内伊勢栄 1時間39分 33秒	2	山口徳太郎 1時間27分 15秒	1	赤塚勝次 1時間24分 45秒	3	牟田利一 1時間25分 30秒	1	茂木善作 1時間29分 10秒
明 治	往 路	2	稲毛田安三 1時間28分 00秒	1	下村広次 1時間13分 00秒	1	藤井嘉市 1時間25分 09秒	2	小島三郎 1時間21分 56秒	2	沢田英一 2時間02分 31秒
	復 路	1	山口六郎次 1時間37分 30秒	1	得能末吉 1時間25分 20秒	2	後藤長一 1時間27分 10秒	2	加藤富之助 1時間23分 38秒	4	西岡吉平 1時間41分 27秒
早 稲 田	往 路	3	行田重治 1時間29分 50秒	3	垣内貞次 1時間21分 10秒	4	馬場譲 1時間35分 00秒	1	内田庄作 1時間18分 00秒	3	三浦弥平 2時間03分 13秒
	復 路	2	山下靖信 1時間39分 13秒	3	河野一郎 1時間27分 40秒	3	高木武範 1時間32分 30秒	1	麻生武治 1時間17分 00秒	2	生田喜代治 1時間31分 55秒
慶 応	往 路	4	寺内寿太郎 1時間30分 30秒	4	中山作馬 1時間26分 30秒	2	田中芬 1時間31分 20秒	4	加藤木貞次 1時間45分 00秒	4	二木謙三 2時間29分 31秒
	復 路	4	青木好之 1時間40分 40秒	4	山崎鈴夫 1時間41分 35秒	4	佐藤末蔵 1時間41分 50秒	4	平山十一郎 1時間33分 10秒	3	鴨脚十郎 1時間35分 20秒

○東海道宿場里程距離、奠都駅伝、第1回箱根駅伝と現在の駅伝中継地点の対比

宿場名	(km)	奠都駅伝	第1回箱根駅伝	現在の箱根駅伝(往路)
日本橋	0 起点	上野	日比谷	大手町
1 品川宿	7.85	↓ 26 km	↓ 20.9 km	↓ 21.3 km
2 川崎宿	9.81	川崎	鶴見	鶴見
3 神奈川宿	9.81	↓ 33 km	↓ 19.3 km	↓ 23.1 km
4 保土ヶ谷宿	7.46		戸塚	戸塚
5 戸塚宿	11.39			
6 藤沢宿	5.10	藤沢	↓ 22.5 km	↓ 21.4 km
7 平塚宿	13.75	↓ 28 km	平塚	平塚
8 大磯宿	1.06	国府津	↓ 19.3 km	↓ 20.9 km
9 小田原宿	15.71	↓ 20 km	小田原	小田原
			↓ 16.1 km	↓ 20.8 km
10 箱根宿	18.85	箱根	箱根	箱根
距離合計	100.8 km	107 km	98.1 km	107.5 km

<無断転載禁止>本資料に関するお問い合わせは、以下にお願い申し上げます。

(連絡先)

地域アカデミア研究実践機構 代表 澁谷彰久
 〒258-0015 神奈川県足柄上郡大井町山田 300
 ビオトピア本館2階11号室
 TEL : 050-3479-1511
 メール : shibuya@civ-academia.org
<https://www.civ-academia.org/>